

多文化共生の推進に関する研究会
防災ネットワークのあり方分科会（第3回会合）

平成18年10月7日（土）

【山脇座長】 それでは、定刻となりましたので、ただいまから多文化共生の推進に関する研究会、防災ネットワークのあり方分科会の第3回会合を開催いたします。

議事に入る前に事務局から連絡事項がありましたら、お願いいたします。

【志田補佐】 資料の確認をさせていただきたいと思います。議事次第のほかに、資料1、重川委員の資料でございます。資料2が羽賀委員の資料、資料3が田中委員の資料でございます。また、岡崎委員から、来月21日に開催されます「外国人集住都市会議 東京 2006」の御案内をいただいておりますので、これもあわせてお配りをしております。

【山脇座長】

それでは、早速議事に入りたいと思います。本日は、重川委員、羽賀委員、田中委員の3名の方にそれぞれ約15分間の御発表をいただきまして、議論を進めていきたいと思っております。

では、まず重川委員からお願いいたします。

【重川委員】 では、早速始めさせていただきます。

前回もそうでしたが、今回の委員会の目的として、外国人の方たちをめぐる御発表が多かったものですから、私はあえて、国籍とか性別とか年齢とか宗教とか文化とかに全くかわらず、災害が起こったときに一体、人としてどういうことが大事だろうかということについて、お話をさせていただくことにいたしました。「すべての人をまもるコミュニティー」というタイトルにしております。

まず、前回の委員会でもいろいろ御意見が出たのですが、災害が起きたときに、一体どういうことが起きるのか、どういう混乱が起きるのか。とりわけ言葉であるとか、生活習慣の異なる外国籍の方たちの場合、どういう問題が起こるのか。いろいろな御意見が出ましたが、すべての人にとって、災害が実際に起こってしまったときに必ず乗り越えなければいけない3つの共通したハードルがあると考えています。

1つ目は、当たり前のことですが、命を守るというハードルです。2つ目は、生き残った人たちの暮らしをどうやって維持していくかということです。とりわけ災害時には、さまざまなライフライン、社会のフローのシステムが止まりますので、そういう状況の中で、最低限の生活をどうやって維持していくのかということが2つ目のハードルになるかと思っております。そして、3つ目が、再建とか復興、災害でいろいろなものを失った方たちがどうやって新しい生活に適応し復興していくのかというプロセスです。

この3つのハードルは、どんな人にも必ず平等に立ちはだかるハードルでございまして、

じゃあ、これをどういうふうに乗り越えていけばいいのかということを見ていきたいと思います。

きょう、事例とし挙げさせていただきますのは、もうすぐ2年になりますけれども、新潟県中越地震で大きな被害を受けました小千谷市の高校生に作文を書いてもらいました。去年の秋に書いてもらいました。小千谷には県立高校が2つあります。小千谷高校と小千谷西高校という高校ですが、そのうち小千谷西高校の全校生徒に、1年たって「自分への表彰状」というタイトルで作文を書いてくださいと言いました。今から御紹介しますのは、高校生の作文をそのまま抜き出したものです。人口4万人で、魚沼産コシヒカリと錦鯉、古くは小千谷縮という織物が有名なところですが、小さな都市です。

まず1つ目のハードル、命を守るというハードルの中で、高校生たちが何を感じていたか。あの地震は内陸直下の地震でございましたので、極めて激しい揺れが数十秒、時間にすれば比較的短いのですが、続いた地震でした。「とてつもなく大きな恐怖の時間のなかで」。これは女子高校生です。ちなみに、あの地震は夕方の5時56分。しかも土曜日でした。案外、土曜日の夕方というのは、家族ばらばらに過ごしているのだなということがわかりました。

「地震当日、家には姉と私の二人しかいなかった。突然大きな地響きが耳に入った。私は最初大きな雷が落ちてきたものだと思っていた。しかし、続いて突き上げるような縦ゆれがどんどんその威力を増すように大きくなった。そこまでたっても私はまだそれが何なのか分かっていなかった。その縦揺れにとって代わったように、次いで身動きもできないような横ゆれに変わった。グラグラガタガタと家具や物が勝手に動き、落下し、部屋の端にあった水槽がガシャン！と音をたてて砕け、私の足元に水の流れる冷たい感触が伝わった。目もなれない真っ暗闇の中感じるのは音と感触のみで、震えてすくんだ足を立たせて、必死になって外へ姉とともに飛び出した。」

同じような体験をたくさん的高校生がしています。そういう揺れの中で、自分の命を守る。それから、そばにいた大切な人の命を守るということをしています。

「自分は地震があったとき小千谷にいた。電車が来るまで小千谷のいろいろな店に友達と二人で遊びに行っていた。ある店によった。そこでクラスの副担任の先生と会い少し話をして、電車の時間なので帰ろうと思ったそのときにいきなり地震がきた。店がゆれ商品や棚などが倒れてきた。副担任の先生も床にたおれてしまった。先生は妊娠していた。先生の上に棚がたおれてきた。自分と友達が二人でその棚を支えた。怖いという気持ちより先生を助けなければという気持ちのほうが強かった。」

これは女の子です。家にいた子です。

「その時私は廊下にいた。同じく廊下にいた母が『火！！』と言って台所へ入ろうとしていた。その瞬間私は母にしがみついていた。前にテレビで見た地震時の誤った行動でゆれているときに火を消しに行ってはいけない、という事を思い出したからだ。私は地震のせいで少しパニック状態になっていたのか、『絶対に母に火傷をさせたくない』という思い

からか十数秒間ずっとしがみついていた。一方母も『火事になったら大変』と思っていたらしく、『はなしなさい』とか言いながら私を振りほどこうとしていました。揺れがおさまったときには台所は足の踏み場もないほどにグチャグチャになっていました。そんな状況を見て『母が台所に入るのを止めてよかった』と強く思いました。」

たまたまテレビで見ていたことをこの子はちゃんと覚えていました。とっさのときに、それを行動に移すことができます。

そして、揺れがおさまり、身近にいる大切な人の安全を守って、次にやったことが、ひたすらみんな、家族の安否を確かめに家に帰るという行動をとっています。これは男の子です。

「父と私は自分たちの住む村へ帰ることにした。しかし道には無数の割れ目ができており、段差も激しい。仕方なく私たちは家まで歩いて帰ることにした。池の水が道路にあふれて、錦鯉が死んでいる。とても道とはいえない道だった。しかし、不思議と疲れることはなかった。ただひたすら村に戻ろうという気持ちしかなかった。その日は晴れていて星がとてもきれいだったことを覚えている。何時間歩いたのだろうか。やっと村に着いた。が、そこは私の知っている塩谷の風景ではなかった。ほとんどの家はつぶれていて、木も倒れていた。しかも小学生が三人亡くなっているというのではないか。いろんなことが一気にあり過ぎて状況を飲み込めないままその日は寝てしまった。」

たくさんの地域が孤立しました。ごらんのとおり、道路が崩れ、建物が倒れ、寸断された孤立集落が発生した中で、それでもひたすら家に帰る。家へ家へとみんな戻っていきました。

さらに、あの地震では、大変余震が多かったのがもう一つの特徴です。最初にとっても大きな恐怖をみんなが感じていました。その後の余震というのは、我々にはうかがい知れないぐらい、ちょっと音がただけで、びくっと飛び上がるぐらい、大変怖い思いをしていました。

「その時期はまだ10月で、外にいるのは寒すぎて凍えてしまいそうだったので、みんなで車の中へ避難しました。そしてその時聴いていたラジオで、親戚が二人亡くなったことを知りました。祖父母も母親も泣いているし、父親はいろんなところへ救助などのために出向いているし、ここで子どもまで泣いてしまったら誰が冷静に物事を考えるのだろうかと思ったので、私や兄や弟は、なるべく平常心でいようと誓い、大きな地震が起こっても、一緒に揺れてみせたりと、笑顔やおどけていました。そんなことをしているうちに、本当に、その状況を楽しむようになっていました。」

これは女の子です。

「揺れは何回も続きました。そのうち外がざわざわしてきたので外を見てみると、近所の人たちが駐車場に集まっていました。私の存在に気づいてくれた一人の人が、『外の方が安全だからおいで』といったので家から出ることにしました。家から出るときは、家が壊れていなかったから、障害物はなくてよかったけど、寝たきりの祖母を外に移動させるの

は大変でした。祖母はいつも寝たきりなのに、車中で座っているのはとても辛いのだろうなと思いました。このような災害のとき、高齢者や障害者などの人は、私たちより多くの不安を抱えていると思います。」

多分この子は、自分と寝たきりのおばあさん、2人きりで地震に遭っていました。そして、1人で寝たきりのおばあさんを外に出すこともできず、多分途方に暮れていたところを、近所の人がそういう存在を知っていて、声をかけて、おばあさんを外へ連れ出すのも近所の人が手伝ってくれていると思います。その一言は、この子にとってはほんとうに安心だったと思います。

そして、2つ目のハードルです。生活を守るという中で、すべてのライフラインがとまったとき、どうやって自分たちの暮らしを守ったか。

これは女の子です。

「少しおさまってから近所の人たちと一緒にいた。そのとき近所の人たちみんながお互いに助け合っていた。すごいと思った。次の日から近所の人たちとご飯を食べた。ご飯はみんなの家から集めた物を使ったごはんだった。みんなで作ってみんなで食べた。地震で家がめちゃくちゃになったけど、すごく楽しかった。自分は料理を手伝ったり、食器を洗ったりした。いつもなら親の手伝いなんかしないし、やりたくもないけど、その時はすごく手伝いたい気がした。手伝うことがすごく楽しかった。余震がおさまってみんなが家に入れるようになってきた。嬉しかった。でも少しさみしかった。でも家で暮らせるようになってからも、救援物資をみんなで分けたりしていて、なんか助け合っていてすごいなあと思った。これからも何があるかわからないけど、周りの人たちと助け合っていきたいと思った。」

ご覧のとおり、4万人の人口のうち、ピーク時には約3万人が避難生活をしました。当然公設の避難所には入り切れないために、ビニールハウス、車、車庫、いろんなところで、みんなが避難生活を送りました。避難所で大変大きなアンバランスが起きています。物が届くところもあれば、自分たちで頑張ったところもあります。1週間、クッキー5枚で過ごしたという高校生の作文もありました。

これも女の子です。

「去年の10月23日に地震が起き、それから数日たったある日のことだった。袋に入ったパンを見つけ、父に『これどうしたの』とたずねた。すると父は、学校で配布していたものをもらってきた、と言うのだ。私は正直だいぶ戸惑った。なぜなら私の家にはまだ食料も残っていたし、それほど困っていなかったからだ。後日、友達にそのことを言った。すると友達も『私もそれ、お母さんに言った』と教えてくれた。そして、「でも、『他の人より自分たちのほうが大事』と言われたよ。」とも教えてくれた。私には、それが分からなかった。あまり困っていない私たちが、他の困っている人の事を考えずに暮らしていこうとするのだろうか。それとも、私のこの考えが甘いのだろうか。わからない。」

これは小千谷市で最も避難者数の多かった総合体育館という避難所です。大分ピーク時

を過ぎているので、大分すいてきていますが、多いときには3,000人が生活していました。何度もテレビに映ったために、ボランティアのほとんどはこの避難所に殺到しました。ですから、この避難所は、自衛隊の炊事班も駐屯し、全国からの焚き出しボランティアもいました。ですから、3度3度、ほかの避難所に比べれば多彩なメニューが食べられておりましたし、物も行き渡っていました。

最後、3つ目の暮らしの再建、復興というところです。

「この震災での自分の行動を振り返って、表彰状をあげられることなんて一つもない。この経験で、私は自分の無力さを思い知った。家族や近所の人、自衛隊やボランティアの方々など、本当にたくさんの人達に助けられた。いくら感謝しても足りないぐらいだ。表彰状を受け取るのは、むしろその人達のほうだと思う。心から、ありがとうと言いたい。それと私は、この大震災を経験したと言うことを驕って生きていくことだけは絶対にしたくない。『地震で大変だったから』といつまでも同じことばかり言っている人を見ると不快になる。少しずつでも、一步一步前進していくことが大切なのだ。妙見のあの事故現場も、メモリアルになんてしないで早く復旧してほしいと言うのが私の正直な意見です。」

そして、最後です。

「中越の地震から一年くらいたったが、その間日本各地で大型の地震が起きている。もともとこの日本は大きな地震が起こることはよそうできたことだろう。つまりこれから近い将来、大多数の人達が大きな地震にあうと思う。それはしかたのないことだから、起きた後、被災者と助け合うことが重要だと思う。助け合うというのは、被害にあった当人も助ける側であるということだ。震災を経験して思ったことは、他の地域から来てくれるボランティアや自衛隊だけでは人手が足りない。だから被害にあった人達も、積極的に救援活動に参加した。そのおかげで、食べ物や水などの配給がスムーズに進んだと思う。」

以上、その後幾つか、お手元のコピーには載せていただいておりますけれども、3つのハードルの中で、すべての人が、災害に備えて何をしなければいけないのかということをもとめさせていただきました。

【山脇座長】

もしよろしければ、レジュメの最後の部分のご説明を簡単にお願いしてもよろしいですか。

【重川委員】 お手元のコピーにあるとおりですけれども、よく言われていることです。災害が起きている真最中は、だれも大切な人を助けてあげることとはできない。最初のハードルというのは、すべての人が自分の責任で自分の安全を守らなきゃいけない。どんなに助けたくても、何もしてあげられないというのが実態です。そのために、だからこそ、さっき女子高校生がお母さんを助けて、揺れている間は危ないものに近づいてはいけない、じっとして身を守らなきゃいけないということを覚えていたと言いましたけれども、具体的に自分の命を守るための方法を知ったり、あるいは、水槽がガシャンと落ちたり、テレビが棚から落っこちたり、そういう物を防ぐために、例えば地震に備えて家の中の落下物、

倒壊物を防ぐ、命を守るために備えをしておく。そういう事前の備えをすべての人が知って、実行しておくということが、最初のハードルを飛ぶために大事だろうと思います。

それから、次にみんながやった、身近にいる人たちの大切な命を守る。これはどういうことかという、やっぱり知っていれば、守ろうとしてくれる。知っていれば声をかけてくれる。つまり、自分のことを心配してくれる人がどれだけ周りにたくさんいるか。特に災害が起きた直後は、その場にいる人、地域のコミュニティー、あるいは職場のコミュニティーが非常に重要になってくると思います。自分のためにも、たくさんの知り合いをつくっておくということは、いざというときに自分が心配してもらえる、声をかけてもらえるということに非常に役立つと思います。

それから、次のフェーズにいくと、いろいろな避難生活の過ごし方をしていますが、やっぱり人、物、場所、技術、知恵なんかを、残された資源という意味では、物だけではなくて、人手もある、物もある、スペースもある、技術もある、いろいろな知恵もある、そういうものを出し合うためにさまざまなコミュニティーチャンネルが次の段階では重要になってくると思います。これは、地域コミュニティーだけではなくて、学校だったり、職場だったり、趣味のサークルだったり、たくさんのチャンネルを持っていれば持っているほど、苦しい生活を乗り越えることが楽になっていくと思います。

それから、最後の復興のところで、高校生が言っていましたけれども、助けられるだけではなくて、自分が主役になって歩いていくことが重要だと。よく被災者の生活再建のために支援金の多い少ないとか、お金をあげれば生活の再建が進むと言われていました。確かにお金というのは非常に重要な要素ですが、じゃあ、今までのケースを見ていて、お金さえあれば復興ができるかという、決してそういうわけではないと思います。

これは、阪神・淡路大震災後の5年目と10年目に神戸市が実施されたアンケートの結果ですが、白い棒グラフが5年後、灰色の棒グラフが10年後です。被災者の暮らしの再建に当たって一体何が重要な要素だったのかというアンケートの結果ですが、5年目は、「住まい」という要素がトップになっています。住まいがもとどおりになる、住まいが戻るというのが、生活再建の中で被災者自身、重要だと感じています。一方、10年目に何がトップになったかという、「つながり」という項目がトップになっています。これは、人と人とのつながりという意味です。例えば、さっき申し上げました暮らし向きとか、経済、あるいは行政とのかかわり、公的な支援、そういったものは、5年調査、10年調査でも、予想以上に低い値になっています。こういうところから見ても、さっき申し上げた、お金とか制度とか公的支援だけで、被災者自身、暮らしの再建を実感するわけではなくて、こういったつながりとか、あるいは心と体の健康。それから、人生観、価値観の変化とか、あるいはこれからは自分たちが震災体験や教訓を発信して、いろいろな支援を受けた人たちに逆に能動的に情報提供していくことが自分たちの暮らしの再建にとって重要な意味を持つといった答えが10年目に出ております。

実際の災害の経験者を通して、こういう声が聞かれているということで、3つのフェ

ーズの主演は、すべての人にとって自分自身がどれだけ頑張れるかというところが大きいのではないかと思います。

【山脇座長】 ありがとうございました。皆さん、御質問をお願いいたします。

【李委員】 高校生の作文の中では、外国人の高校生はなかったのでしょうか。

【重川委員】 私が見る限りは、姓名は日本名の方ばかりでした。

【李委員】 外国人の災害経験者の話も聞く機会があれば幸いと思いますが。

【イシ委員】 関連した質問ですが、これは作文コンテストといいですか、あえてこういうふうに広く作文を応募したものでしょうか。それとも普通に学校で学生たちが書いたものを何らかの形で集められたということでしょうか。

【重川委員】 去年の秋、高校生に防災の授業をやってほしいという御依頼を受けました。私自身は被災をしているわけでもなく、被災経験を持っている、言ってみれば大先輩の高校生に今さら何の話をしようかと大変悩みました。実は高校の先生たちから、高校生は何にも言わないのだけど、みんなそれぞれ大変な思いをして、兄弟を亡くした子もいるし、家が全壊した子もいるし、仮設住宅から通っている子供たちもまだいるし、みんなそれぞれ頑張っているという話を聞きました。多分高校生ですから、友達同士、先生、あるいは親にも震災体験やどういう気持ちなのかということは何も話していないだろうなと思ったものですから、さっき言ったように、自分への表彰状ということで、この1年の思いを作文にして書いてくださいというふうに私から学校を通じて依頼をしました。自分と違う友達が震災を経験して何を考えているのだろうかということを高校生たちに知らせたいと思って、実はきょうは短くしたのですが、たくさんの高校生の話を幾つかのフェーズに区切りました。きょうお話ししたのも、高校生の作文を全くいじっていません。言葉も変えていません。ただ削るという作業だけをしてはいますが、書いた言葉のとおり、ほかの子たちが一体何を思ってこの1年を過ごしてきたのかということを紹介するという授業をしたというのが事の経緯です。

【山脇座長】 それでは、申しわけありませんが、あと2人の御発表がありますので、ひとまずここで重川委員の御発表に関する質疑は終えたいと思います。続いて、羽賀委員から御発表をいただこうと思います。

【羽賀委員】 今、李さんとアンジェロさんから作文がないかとおっしゃられましたが、私のところにあります。地震後の11月に外国籍市民の皆さんから体験談を書いていたいて、まとめてあります。

私の話の視点は、長岡市の実体験を通して、実は私どもが考えていたこととあまりにもずれが出たということを示し皆さんに教訓としてお話ししたいと思います。

私どもも姉妹都市交流を主とした国際交流協会が主体の市でありました。5年前に私が来まして、今月で満5年になる国際交流センターですが、2,200名の外国籍の市民が長岡におられて、その方たちに対して我々は一体どういう支援ができるのかという目線からこの市民センターを立ち上げました。

一番大事なことは、神戸で起きたことは大都市型ですが、長岡の場合は、まさに中山間地型の代表で、人材がないということです。日常的にも私たちはボランティアを育成しておりましたが、実際ボランティアも被災者になってしまうという事実は、起きて初めて気がつきました。ですから、地元から1人も駆けつけられない。私も、システムは、公式ではないのですが、自分のメモ書き程度につくっておりましたが、実際スタッフも、2人は全壊のため来られませんでした。市外に出かけていた方は、新幹線も道路網も断たれて、帰ってこられない。そうすると、ただでさえ人が足りないところに、災害対策室にほとんどの職員をとられてしまって、機能したのはたった2人でした。そういう状況の中で、私たちがシステムということを考えた場合、日常のシステムではなくて、緊急時に立ち上がった人間で、その状況に合わせてどういうふうにシステムを立ち上げるかという、スーパーバイズができる人材の必要があるということです。

それともう一つは、私たちのように小さな町では、特に人材がない。そのときには、全国とネット化する中で、得意技をいただいていくということを我々はやりました。最初に地震が起きた翌日、私はオフローダーに乗って、被害が起きたであろう地域を朝一番に全部回ってみて愕然としたのは、道路網の決壊、それから、山古志は完全に連絡がとれませんでした。ですので、行ってみて、ここが震源だというのは気がつきました。そうすると、我々が受けているマスコミからの情報というのは、初動においては非常にずれがあるということで、私たちはまず自分たちの中で感じた対応をどう考えるか。特に今、国際結婚が20組に1組と言われているのですが、田舎の場合は、もっと進んでいます。どうしてかという、花嫁さんの問題があります。ですから、私たちの場合は、国籍でくれないということにも初めて気がつきました。留学生、研修生、花嫁、それから、いろいろなビザの形であろうと我々是对応していかなければならない。国籍問題ではないのだということです。それは、生活環境が非常に多種にわたるということです。

私たちが一番困りましたのは、長岡の2,200名の外国籍市民の方のうち800名弱が中国の方です。2番目がブラジルの五百数十名です。この2つの国というのは、実は地震の体験が非常に少ないわけです。ですから、まず何が起きたかが理解できなかった。それから、起きたときに何をしたらいいのかがわからない。その後、今後どういうふうなことが起きていくのか、その明確な、正確な情報が手に渡らなかったということです。それと私たちも、地震が起きた瞬間に、皆さんが一体どこへ消えてしまったのかが把握できなかった。

すぐに立てた対策は、とにかく避難所に入っただけであれば、安否確認ができる。サービスの提供ができる。それから、いろいろな情報の手渡しができるということを主体にしまして、まず状況把握ということで動きました。地震が起きた翌日が空白になっているのは、私たちはいろいろな情報集めをしていたからです。一体だれが来られるんだろう。一番驚いたのは、先ほど申し上げたとおり、足元の人間が全く来られないという状況から、一体何をしたらいいのだろうと。それから、問い合わせに驚いたのは、災害は行政枠を超

えて来ます。でも、支援体制は行政枠でしかできないというところがネックになってしま
うんですね。ですから、ここから得た教訓は、事前協議の中で、どれぐらい私たちが事前
に行政枠を超える作業をできるようにしておくかということも非常に大事ですし、一番の
核は、自助努力をどういうふうにするか。自分で何が起きたかを判断し、何をしたらいい
かがわかって、どうすればいいかという行動を起こせるか。そこにポイントがあるのです
が、きょう、私、手元に実物のリーフレットを持ってまいりました。

これは、後ほど説明いたしますけれども、実は2,200名のうち、たった241人しか
避難所に入らなかった。存在すら知らなかった。私どもは、皆さんが外国人登録をされる
ときに、生活のリーフレットを配っています。その中に災害時にも入れたのですが、地震の
知識のない方にそんなものを渡しても全然役にも立たない。むしろ、緊急時というのは、
パスポートの中にこれが入っていたということで、それを使えば一番いいかなと。

もう一つは、私どもも地震が起きた瞬間にびっくりしたのは、皆さんが子供になってし
まったということです。かぎ穴にかぎが入れられない。私のところは6階建てのビルです
が、99%というより、私を除いた全員が、ただ茫然として立っただけでした。何を
したらいいのか、職員すらもわからなくなっている。ですから、理論としてのシステムと
それが実行可能であるかというところは、実験値ではないのですが、体験を通して私たち
はすり合わせをしておく必要が非常にあるなと思いました。

その図のとおり、私たちはローラー作戦で避難所を見回りに行ったのですが、全避難所
を回っても、皆さん、いないんですね。日中は、研修の人たちも、派遣の人たちも、派遣
で行ってられるブラジルの方たちが特に多かったですが、皆さん仕事をさせられていま
した。ですから、避難所にいないですね。もっと驚いたのは、ここに出てない避難所がも
う一つありました。それは車でした。避難所はつぶれるのではないかかという発想で見ら
れて、避難所まで一たん来たけども怖いということで、車で駐車場にまた逃げられた。そ
れは後々気がついたことです。

ここの避難所に入れるまでの第一初動というのに、私たちはすべてのエネルギーを注ぎ
込みました。最初に私たちが届けたかったことは、何が起きたかを知ってほしい。でも、
私たちには言語能力がなかった。全国ネットワークがたまたまつながったので、全国ネッ
トに一元化をするということで、多文化共生センターを通して、私のところからリクエス
トを全部上げました。そうすると、その後ろのコーディネーションは、僕は当初は全然知
らなかったのですが、リクエストに対しての答えだけが私を通して全部おりてきました。
ですから、30分以内での翻訳。それから、ボランティアが必要だというと、即手配をし
てくれる。もう一つは、音訳も入りました。一番右のグラフがおりたところ、11月3日
というところですが、ライフラインが戻ると同時に、会社の再開、それから自分の家の後
片付けということで、一気に皆さん帰られた。そうすると、ほんとうにそこにおられるか
もわからない。そのときには音で伝えるしかないということで、これをやりました。

もう一つは、声の力というのが大変力を持つということです。文化的な背景が違くと、

同じ震度6でも、受けとめ方は倍も違います。特にブラジル系の方は、ものすごい受けとめ方でした。ですから、パニックで、「地球が壊れた」とおっしゃいました。それはほんとうにそうだと思います。意外と冷静なのが中国の方でした。冷静に見えたのですが、そうじゃないですね。その対応が非常にいろいろ出ました。ブラジルの方は、カセットを持ってきて、避難所で一晩中踊っていられた。それは不安の解消という文化的な行動だったのです。中国の方たちは、けたたましくしゃべっておられました。これも不安をお互いに解消する。ただ、それを日本の人たちがどう受けとめるかという誤解の問題があるんですね。

ですから、1つは、通訳の能力の問題、もう一つは、文化的な通訳の問題があるということです。私たちはまず、全国からの支援を受けた中で、避難所の多言語表示を張っています。ここには、私たちがいますということを情報の中に入れていったのですが、横浜さんがそれを提供されたことで、非常に助かりました。それを見られた方は、母語であるということはすごくうれしかったということです。

もう一つは、声ということで、ブラジル系の方のパニックを静めるにはどうしたらいいかということで、領事が来られたときに、そのままコミュニティーFMに出させていただいて、「私たちがいるから心配するな」と声を流した瞬間に、パニックはほとんどおさまりました。その後、NPOと同時に子供さんのおもちゃ等を一緒に持ってきてくださいということで、母語でカウンセリングをできる方を入れてもらいました。

中国の方は、非常に身内が強いので、心配されて帰ってこいということで、いろいろな問い合わせがあったのですが、大使館、大学、航空会社と協議しまして、3分の1ずつ出させていただいて、皆さんに一時帰国をしていただきました。

一番私が怖かったのは、地震の災害が半分、ジャーナリズム災害が半分だということです。おもしろおかしく書く。それから、記事を最初からつくっておいて、そこに合うファクター、事実を探しに来るということがものすごくありました。こういう外国の人を映像に撮りたいからと私のところに来たのですが、私は「彼らは疲れていられて、もう嫌だとおっしゃっている。周りの日本人も、そうやって毎日毎日来られると迷惑だとおっしゃっているから」と説明し、大変な労力強いられました。

とにかく私が大事だと思ったのは、何が起きたかを正確に伝える。自助努力を大きくするというので、これをつくりました。皆さんのお手元にあると思いますが、これはサンプルで入れた日本語でしかありません。これはポルトガル語、中国語、英語と今3つあって、韓国語をつくっている途中ですが、みそは、パニックになると文字が読めないということに気がついて、それと、自助努力でこれをパスポートに入れていただく。こっちは、ピクトグラムという絵で表示されています。それをこういうふうに4つ折りにして、ここを輪ゴムでとめて、パスポートにとめると、何が起きたかがこういうふうになる。めくっていただくと、ここに、どういう対応をしたらいいのか。それから、火が出た場合、けが人が出た場合は119番。それから、長岡市内の情報のとり方。その次のページは、逃げてはいけない場所、やり方ですね。3つ目は、避難所とにかく入って欲しい。そうすると、

何があるかということ。4番目は、これは非常に工夫したのですが、氏名と住所。これは安否確認のためです。もし御遺体になられたり、大けがをされたとき、御自分の口が利けなくても、これで身元確認ができるかなと。それで、最寄りの避難所は、登録時にこれを渡すときに、教えておくということです。それから、もう一つは、私の話せる言語。国籍ではないです。話せる言語のほうが、現実の場合には大事です。それから、大使館の電話番号。国内の緊急連絡先、国外の緊急連絡先。最後は、「私を避難所に連れて行ってください」と日本語になっているのは、隣の人でも、だれでもいいけど、日本人にこれさえ見せれば、避難所に一番短距離で入れるかなということで、これを1年かけてつくりました。何回も何回もつくり直しをしてやったのですが、避難所に入って落ちつけば、ここに文章が出てきます。それから、ああ、なるほどと理解してもらえればいいのかと思っています。これは、自助努力を大きくするための工夫です。これは実は紙が投票用紙です。ですから、こうやっても切れないし、水に落としても平気だし、形状記憶です。ここに行き着くまでに1年かかったのですが、紙だったら多分パスポート、水害時にはだめになる。今考えているのは、水害バージョン、津波バージョン。それから、これを今度はアジア全域に災害教育なんかにも使えるバージョンもつくろうということで考えています。

【山脇座長】 ありがとうございます。では、皆さんから御質問を受け付けたいと思います。いかがですか。

【段委員】 さっきおっしゃった800人の中国人の体験をもう少し聞かせてほしいです。作文も書かれているということですが、日本語で書かれたものですか、それとも中国語ですか。

【羽賀委員】 母国語で全部書いていただいています。

【段委員】 そういった作文をいかに共有するか。長岡の体験をもっと多くの外国人に知ってもらいたいです。

【羽賀委員】 11月に私たちはアンケートを実施しています。「何が困ったか」から、「どんな情報がよかったか」ということで、それを必死でまとめました。2月27日に外国人支援の全国フォーラムを長岡で主催しました。とにかく私たちの体験を小さな危機感のない自治体はどう受けとめてくれるかということが一番の課題ですね。ですから、一日も早くこの体験を共有したいということで、全国に発信したのですが、そのときに一番課題になったのはこれかなと思って、同時にこれをつくろうと思っていたのですね。

【段委員】 この配布はどういうふうに配布しているのですか。これはすごくいいと思います。

【羽賀委員】 私のセンターに来られる方は、古い方が多いので、どんどんそれを手渡ししています。それから、登録をするときにまず渡しています。

この後にわかった支援体制としては、ただ日本語を教える今までの日本語クラスではなくて、来られて、日本の文化が何にもわからない、孤立しているという人たちが、お友達をつくったりできる場ということで、「日本語広場」というのを始めました。ですから、そ

の人に合わせて、テキストではなくて、日本語を指導して、その人をサポートしてくというのを始めたら、週末、多分きょうも100名を超えていると思いますが、それぐらい人が集まるようになりました。それが防災時にはネット化する。一たん事が起きますと、だれを思い出すか、どこを思い出すかしか、私は、支援体制はないと思います。日常化した国際交流がすべてになるとあってやっています。

あとは、多言語でFM放送を常に流すようにしています。それには、冒頭では防災ということ流し、イベント情報を流し、それから自分たちのアピール時間、こういう3つの部分にして、自分の放送だということで、災害時にはFMを聞くという習慣をつけてもらうようにしています。

【段委員】 ちなみに、パスポートに入っている率は何%ですか。全員持っていますか。

【羽賀委員】 今はそうしたいと思って、どんどんそういうふうにはしていますけど。登録をされる方は100%です。ただ、よそで登録されて、派遣で来られる方が今非常に増えています。ですから、派遣というのも実は大変大きな問題を含んでいますし、研修員制度というのは、災害時には猛烈なネックになってくると思います。

【段委員】 最後に小さいところですが、真ん中のところ、「情報」の中国語の訳は、正確の訳語は「信息」です。ただ、在日中国人は多分わかります。中国からの観光者に渡すのは少し戸惑うかなと思います。

【羽賀委員】 ありがとうございます。これは、私たちはマスタープランとして、皆さんに共有していただいて、いろいろなところからいろいろな御意見をいただきたいなと思っています。

【イシ委員】 羽賀さんのお話はすべて共感できることばかりで、ほんとうにすばらしいと思いました。文化的通訳の御指摘にせよ、国籍ではなく話せる言語を記入させることにせよ、すばらしいの一言です。そういう中で、1点お伺いしたいのは、果たして資料2-1のこれをパスポートと一緒に入れるというのがベストなのかどうかという疑問があります。これは財布のほうがベストではないかという素朴な疑問があるのですが、この点についてはいかがでしょうか。

【羽賀委員】 私たちも、とりあえずパスポートは命の次に大事だということで、パスポートと思ったのですが、実は別の意見もありまして、外国人登録証と一緒にしたらと。

【イシ委員】 もちろん財布というのはそういう意味だったのですが。

【羽賀委員】 ところが、これ、小さくもしてみました、なりませんでした。だから今、私たちはもう少し工夫が要るのかなとは思っています。またそういう意見をどんどんいただけたらと思います。

【イシ委員】 もう1点は、まさしくおっしゃったとおり、特に在日ブラジル人の場合は、陰の主役が人材派遣会社、人材派遣業者になるわけですがけれども、彼らとはうまく話も通じ、連携はとれたわけですか。

【羽賀委員】 とれませんでした。

【伊シ委員】 そこがネックだと思います。

【羽賀委員】 ですから、私たちも心配で、大きな派遣を行われている会社に行ったときに、「人権を優先して休みにしました」と言ったのに日中だれもいないということはおかしいなと思って聞いたら、そんなこと市には言ったけど、実際みんな仕事をしていました。それから、中国系の方は、研修員がものすごい数おられたのですが、囲い込みです。保護をしているように見えるのですが、そうではありませんでした。

【李委員】 避難所は、日本人と外国人と一緒にさせたと思うのですが、その中でトラブルとかはなかったのですか。

【羽賀委員】 それはないですね。最初出たのですが、ほんとうに最初に出ましたね。さっき伊シさんに申し上げたように、文化通訳がすごく大事です。うちではふだん中国の相談員がいて、相談員に電話したら、「羽賀さん、いいのよ、中国人は放っておけば」と言うんですね。「えっ」と言ったら、「中国では事が起きたら自分以外信頼するな」というのがあるから、1人で生きていくから放っておけばいい」と言われて、えっと思ったんですね。でも、それはやっぱり行動に出ました。ですから、避難所に入ったら、おにぎりをこんなにひとり占めして、毛布をこんなにして、その上にこうやって座っているんですね。日本人からは非難ごうごうで、私のところに一触即発で来たわけです。私は行って、皆さん集めて、「実は中国の人はこういう文化で、1人で必死に生きていこうと思っておられるけど、日本は実はみんなで共有するから大丈夫です」と。日本人には「実は中国の方は……」ということで、お互いに文化交流ができるように私のほうで話して、一緒にボランティアをしてもらったら、それはおさまりました。

ただ残念だったのは、日中関係が悪化していたときなので、学生が2人、デマをメールでもって大使館に飛ばしたのが、大変な騒ぎになりました。そこにジャーナリズムが食いついて、「追い出された中国人」というのを書いたのですが、実際はそんなことを言った人もいなかった。事実関係を追えば、何にもないのですが、ジャーナリズムが一たん全国に配信したものは撤回できません。だから、私たちは、特にデマという問題を、外国籍市民を考えるとときにどう考えるか。

もう一つは、市政、町政が、外国籍市民をお荷物と考えるか、知性の担い手と考えるかで、多文化共生の概念はひっくり返ってしまうと思います。

【李委員】 たまたまうまくいったと思うのですけれども、共生とか、避難所のリーダー的な存在の方が、どれぐらい外国人を理解して、それを日本人に伝えるのかということも大事だし、やはり外国人自身にも、日本人の避難所生活を深く理解するように、やはり調整が初めから必要ではないかと思います。

【羽賀委員】 それは、例えば私ども、どこにおられるか見つけると、すぐにその人たちを1カ所に集めていたんですね。そのほうがお互いに情報の共有もできる。さっき時間がなくて全然説明できなかったんですが、ここにカルテというのがあります。これは避難所に入られたら、どこにどのグループがいてということと、ボランティアが入ると、信頼

がないので、ボランティアの人がちゃんと受けたことを申し送って、毎日同じことを聞かない。答えをちゃんと言っているということ。病院に通ったりとか、個人的なものが深くなったり、薬の話が出たら、個人カルテに落として、それは外には一切出さずに、それを持って毎日ボランティアを回るシステムをつくったんですね。これもすごく大事なことだと思います。

【山脇座長】 ほかにいかがですか。避難所での外国人と日本人の摩擦というのは最初だけで、そんなに大きな問題は起きなかったということですね。

【羽賀委員】 そうですね。実際には起きていなかったというケースが3分の2です。それを起きたようにつくられて、それが新聞に載って、問い合わせが猛烈に来て、その後始末のほうが大変だったぐらいです。

【山脇座長】 マスコミの誤報ということでしょうか……。

【羽賀委員】 誤報じゃなくて、意図的に仕掛けたんですね。そういうほうが売れるんですね。100のあんまりいい記事じゃないものの中に1つ入れると、スパイスになるとおっしゃっていました。

すごく私が困ったのは、オーストラリアのお嬢さんが2人長岡におられました、お母さんが来ておられて、「あさってには帰ります」とおっしゃったのですが、新幹線がだめで、私のところに電話してきたわけです。私のところから迎えに行って、市役所の1階に置いて、情報もできる。うちのボランティアをしてくれました。手配は全部うちでして、お母さんが帰れるようにしたのですが、下にいるときに、あえてインタビューをそういう形で誘導して、「孤立する外国人」って実名まで入れて流したんですね。問い合わせが大変で、うちみたいに小さいところは、その対応だけでつぶれそうだったです。

【山脇座長】 メディアの問題というのは、日本のメディアですか。それともエスニックメディアですか。

【羽賀委員】 日本のメディアです。向こうのメディアはよかったです。ブラジルの方たちも、インターナショナルプレスが来てくれて、仕事そっちのけで、みんなを助けることをやってくれました。すごくいい関係がいっぱいできました。

ジャーナリズムは、往々にして横暴であるということと、それに対策を打てるシステムをつくらないといけない。ですから、情報を日本人側にも正確に。何か誤報が流れたときには、それを打ち消すシステムをつくらないといけない。

【山脇座長】 どうもありがとうございました。大変貴重なお話を伺えたと思います。

では、続きまして、田中委員からの御発表をお願いしたいと思います。

【田中委員】 東洋大学の田中と申します。

今、重川先生、羽賀先生のお話を伺っていて、1つは、領事の方がお話をされて、パニックがおさまる。パニックという表現はやめていただきたいのですが、非常に心の動揺がおさまったということですね。あるいは、重川先生が一言の安心という言い方をされたと思います。実は、一言の安心というのは、とても大事なことで、おそらく多文化共生とい

うことを考えた場合の1つのキーワードになってくるという気がいたしました。

これは外国人の例ではないのですが、聴覚障害の方々にはいろいろなお話を聞くと、自分だけ情報を聞き漏らしているのではないかという不安が強い。これは、おそらくランゲージ・ハンディキャップ、あるいは、コミュニティの中でのネットワークの持ち方というのが、密な人もいれば、疎の人もいらっしゃる外国籍の方々。疎の方々から見ると、とても大事なことだという気がしています。

2つ目は、自分の責任ということを重川先生が強調されましたし、羽賀先生は自助ということを強調されました。私も否定いたしません。とても大事なことだと思っていますが、ただ、それとは違う世界も当然あるだろうという気がしています。具体的に言いますと、そういう自助、あるいは自分の責任という範囲をはっきりしておかないと、できない層がいます。確実にいます。そういう面で、1つは、災害というのは、自然災害、地震や台風が、起こすという側面もあるわけですが、社会がつくっているということを、少しお伝えをしておこうかなと思っています。その中で、特に異文化共生、多文化共生ということ考えたときには、お互いのイメージというものの、これは実はかなりいろいろとギャップがあるわけで、それが災害という緊急事態の中では、意外に難しい問題を膨らませてくるのではないかという問題提起をしてお話しさせていただきたいと思っています。

山の写真を見ていただきましたけれども、おそらく多くの方々はこの山かおわかりになるだと思います。これはどなたでも知っている山です。富士山ですね。これはおそらく日本人のほうが富士山と答えにくいと思います。イメージとしての白富士という富士山のイメージがありますから、こんな荒々しい火山だということは、山頂に行かれた方でないとイメージできない。これも1つのイメージギャップなのです。まさに富士山は火山です。

それから、2番目に、先ほどつけ加えさせていただいたのは、避難所という問題、先ほど羽賀先生からもありましたけれども、日本は小学校とかに避難をするというのが社会システムとして定着をしています。ただ、世界的、国際的に見ると、テントというほうがメジャーです。そういう面で、我々がイメージしている災害のときの対応と、それから、世界的に地震の経験をしている国であっても、そこで考えている対応には大きな差があるということは1つの事実です。どっちがいいとか、避難所に誘導するのが難しいとか、そういう話ではなくて、あくまでも日本人が避難所だと思っているだけであって、羽賀先生が御苦労されたのは、ある意味で当たり前だったということになります。

特にアメリカなんかですと、シェルター、避難所のことですが、最後の手段という意味で書いています。「来るな」とは書いていませんけど、最後の手段だと書いています。そういう面でのすごいギャップがいろいろあるなというのが、今のお話を伺っての1つの直感でした。

これまでの話を少し整理しますと、災害過程というのは、社会システムがつくっているんだ。地震や台風や火山が原因ではあるわけですが、実は社会問題だということが1点目です。

それから、生命の維持という問題と生活の支援という問題。これは重川先生がかなり生活の支援を強調されていたので、あまり触れなくて済むというので、安心しておるわけがありますけれども、実はこの2つのフェーズをかなりはっきり意識しておかないと、いろいろと混同が出てくるだろうということ、これが2点目です。

それから、私自身は、高齢者、あるいは障害者の対策ということを考えてまいりましたが、けれども、直接外国籍の方々のお話をやっていないものですから、むしろそれは私の体験上から、類推しながら3番目としてお話しておこうと思っております。

これは皆様方に釈迦に説法なところがございます。どちらかというと「災害過程」という言葉を社会学系の研究者は使ってまいります。通常、我々はさまざまな社会システムに依存して生きています。今、電気を使っていますし、私はここまで丸ノ内線を使ってやってまいりました。電気、ガス、水道、道路、さまざまな社会システムに依存して、今の生活は成立しているわけです。

災害が起きると、社会システムすべての機能が低下する。ところが、このままですと、生活が立ち行きませんから、災害救助法というシビルミニマムを中心とする緊急時システムが立ち上がってくることになります。そこからが応急対策ということになるわけですが、けれども、応急対策というのはやはり効率が悪いですから、いずれはそれがもとの社会システムが復興をしてくるにつれて、だんだん緊急時システムがもとの社会システムに置きかわっていきます。

そういう面で、実は災害というのは、もちろん被害というとらえ方もあるわけですが、通常システムが機能低下をするということ。それから、緊急システムが稼働して、それを補完するということ。そして通常システムへ復帰をしていくという1つのシステム変更ととらえることができるということになります。

何をこんなこと言っているのかというと、要は、システムに対する適応を要求されますから、情報はとても大事です。それから、それに対しての適応能力というものも求められる。災害時に情報が多言語に翻訳されたということは、適応するために情報が大事だから、やはり必然的だったということになります。

それから、災害過程は非常に長期にわたることだということです。これは重川先生が、生活支援というところまで含めて強調して、復興ということまでおっしゃっていたので、重なる部分です。

3番目は、緊急時システムが被災生活をつくっている。つまり、行政がやっている応急対策がその生活をつくっているんですね。要は、地震の後、あるいは火山噴火の後、台風の後、生活というのを、3カ月、半年、1年ととっていくと、そこは実は自然災害のインパクトというものは、はるかに吸収されて、その社会システムがどんなふうなシステムを提供しているかに依存をしていくということです。

それから、防災教育ということ。先ほどのパスポートに入れるというのは大変いいアイデアだと思うのですが、そういう教育をしておくということです。御承知のとおり、地震

の世界の1割を、そして火山の世界の1割を我が国は引き受けているわけです。これだけの小さな国が引き受けているわけですから、世界的に見れば、地震も、火山もあまり関係のない国が多いということは事実です。あるいは、風水害だって、日本の川を見たアメリカの研究者が、「これは滝だ。こんな急流なのは川ではない」と言った。つまり、例えばドナウ川が氾濫するといっても、1週間とか、そういうオーダーで動く。日本の場合は、数時間であふれてしまう。そういう面では、かなり対応が違うということは事実です。先ほど申し上げましたように、もちろん教育はとても大事な試みですね。ものすごく大事なことです。

ただ、もう片方で、自己責任とかでは太刀打ちできない問題がたくさんある。阪神・淡路大震災、外国人の方が結構亡くなられていますけれども、最大の原因は、地震を知らなかったわけではないんですね。外国人の方の一部は、差別から安いところにしか住めなかった。明らかに社会的な構造、あるいは差別の構造がある。高齢者が亡くなったというのも、もちろん社会的な構造がバックグラウンドにある。やはりそれは、我々はきちんと認識しておくべきだと思っています。

例えば先ほど言いましたように、避難所情報はすべて音声で伝えられていきます。これに対して、言語的な担保をしておかなければいけません。それから、とても大事なことは、「気がね」です。これは極めて日本語的な表現ですが、これはいろんなところで出てきます。先ほどの重川さんの言葉をかりれば、一言の安心ということです。要するに気がねをさせないということですね。これは実は、とても難しい問題をそのとき突きつけられたのは、まだ水が出てない段階のときに、自衛隊が共同のお風呂、入浴を提供しました。そのときに、「シャワーを設置してほしい」という外国の方からの要請がありました。共同風呂に入る習慣がありませんから。これをわがままと見るのか、必然と見るのかということとは、大変難しい判断になると思います。

これは極端な例ですが、そういう問題と、生活支援という部分で見ると、ある団地では世帯の半数がブラジルからの方です。局所的には、そういうコミュニティーができているところがあるわけですが、実はその多くの方々は、すぐ帰る。だから、保険はばかばかしいといって、保険に入っていらっしゃらない方が結構いらっしゃるという実際の問題。そういう制度の問題をどう担保しておくのか。これは多分羽賀先生もかなり苦労された断面がおありになると思うので、やはりそこはしっかりしておく必要があります。

それから、ジャーナリズムの問題がいろいろと議論されていました。関東大震災の朝鮮人虐殺という大変大きなトラウマがあるわけですね。これは、虐殺をされた側のほうにもあるでしょうし、我々のおじいちゃんたち、通常の一般人がやったわけですから、我々のほうにもトラウマが残っている。ただ、必ずそういううわさが出てくるということもまた1つの事実ですね。これは、きちんと新聞は、否定をしてくれていますけれども、ただ、こういう話が載っていくということは、必ずそういう危惧が出てくるということです。

それから、もう一つ大きな新聞記事で、うわさ関係の話で、大変難しい問題だなと思っ

たのは、2000年のことです。名古屋の入国管理局に不法滞在者からの出頭が非常に増えてきた。4倍近かった。その理由は、バブルがはじけて不況になったということもあったのですが、罰金が増えるといううわさが広まっていた。どんな少数の外国籍の方々でも、それなりのネットワークを持っていらっしゃいます。ただ、そのネットワークが災害という、あるいは法改正というモードのときに、きちんと情報を伝えていける、あるいは確認できるシステムというのは、非常に弱い。確かに不法滞在している方がお役所に行って、「おれは不法滞在しているのだが、強制退去されるのか」と聞きに行くことはできませんから、非常に難しい問題をはらんでいる。そういう面では、うわさというのは大変難しい、あるいは非常に危ない部分があるということでもあります。

最後のページになります。これは話題提供ということです。災害とは何かというと、日常が極端化するだけです。したがって、日常の中に埋もれている構造がそのまま浮上してきます。これは、フランスのオルレアン市でユダヤ人の差別が発生して事例があります緊急時には、ある意味で極端化した形で出てくることがあります。

それから、緊急時というのは、制度から落ちこぼれる層が確実にいます。その落ちこぼれる層をどうやって守ってあげるのかということは、とても難しいし、また、いろいろなことを考えておかなければいけない問題になります。

それから、尊厳をどう守るのかということ。

そして、最後に「当事者主義」と書いてありますけど、いろんなことをやっていくと、いかに当事者の方々に対策なりを真剣に、あるいは、どういうのがベストチョイスなのかを答えていっていただくということがとても必要になってくると思います。

最後、「なだしお」の話で終わらせていただこうと思っていたのは、国によって対応が随分違いますので、どう対応していいか難しいということがあります。たとえば、「なだしお」の事例では、日本人というのは、とにかく御遺体に会いたいんですね。最後まで見て確認したい。でも、比較的アメリカはその辺は淡泊だったわけです。「なだしお」の事故のときに、最終的にアメリカは随分と遺体搜索をしてくれたようでもありますけれども、そういう文化差というのをどこまでつかんでおくのかというのは大変難しい問題なのではないかという気がしております。

もちろんそれと裏腹として、災害時というのは緊急時ですから、行政的にあまり多様なことまでやれないことも事実です。その中で公助と自助という理論が出て参ります。ただ、前提としての公助は何をどこまでできるかをきっちり議論しておくべきではないかという気がいたしました。

【山脇座長】 ありがとうございます。では、皆さんから御質問をいただきたいと思っています。いかがでしょうか。

【植田委員】 今、先生の御発言の中で、避難所というのは、最後のとりでといえますか、そういう場所だと日本の……。

【田中委員】 アメリカです。

【植田委員】 アメリカでは、そういう認識でおると。

【田中委員】 認識でいるというか、そういうパンフレットになっています。豊かな、より快適な生活を望む人はホテルに行ってくれということが書いてあります。

【植田委員】 実はそれは、私どもの仕事でもいろいろ議論になっておりまして、避難所はどうあるべきかという議論の中で、当然、新潟県中越地震の反省などをとらえて、避難所はより快適であるべきだという議論と、それから、あまり快適にすると、いつまでも避難所に頼った生活になってしまって、自立するのが遅くなるという意見とありまして、その辺が非常に斟酌できなくて困っているところではありますが、日本の社会において避難所というのはどういう位置づけであるべきかというお話を伺えればうれしいなと思ったのですが。

【田中委員】 現場でやっていらっしゃる植田さんですので、シビアな質問がありましたけれども、ただ、要するにそれは、こうだと、要するに何が快適で、何が不適かというのが、一般論が成立しないですね。したがって、やれることしかできないというところは、きちっと出しておくべきではないかという気がします。ただ、その中で、ある特定のサービスについてこられない人がいたときに、どこまでそれを支えるのかということ。それがぜいたくなのかどうかという議論をしていくべきだろうという気がします。日本では、災害時に行政の支援への期待や信頼が高い。

ただ、深夜に避難勧告が出た災害で、夜ご飯が出ないと怒っている避難者がいた。それはおかしい。しかし、そういう一種のパターン化ができてしまっているというのは大変問題だろうというのは確かにあります。

【山脇座長】 今の質問に関連してお尋ねします。アメリカの場合は、避難所は最後の手段で、むしろホテルに行きなさいという、考え方が強いということでしょうか。

【田中委員】 考え方が強いのではなくて、ちゃんとそういうふうに紙で書いて配ったんですね。それを全員が共通文化として認識しているかどうかまではわかりません。ただハリケーンの被害のほうが多いわけですけども、そうすると、時間的に余裕のある避難ができますので、州を渡って避難をするんですね。なおかつ、向こうの場合には、実は避難所の運営というのは、レッドクロスがやりますから、あまりどこの人だということが関係ないんですね。そういう側面はあると思います。

【山脇座長】 あと、避難所の位置づけについて、アメリカ以外の諸外国の状況は御存じでしょうか。

【田中委員】 トルコは先ほど見ていただきましたところですね。メキシコも基本的にはテントが多かったわけですけども、台湾がよくわかりませんね。台湾の場合には、最初、避難所、小学校に行ったという話は伺っていますが、私は見ていないのですが。ただ、仮設住宅は、行政が土地を提供して、ボランティア団体が住宅を建てて、運営は被災者がやるという体制をつくっております。そういう意味では、ボランティアのウエートが日本より非常に高かった。あるいは、阪神・淡路大震災の教訓をきちんと台湾は見ていたとい

う印象はございます。

【山脇座長】 ほかにいかがでしょうか。

【李委員】 先生への質問ではないのですが、震災のときに、もし避難所に行かない場合に、家に行って、あるいはホテルとか、どこでもいいのですが、別のところにいて、水の配給とか、食料の配給とかを受けられるようなシステムにはなっていないのですか。

【重川委員】 実質的には出しています。

【李委員】 行かなくても？

【重川委員】 ええ。国からお金をもらわなきゃいけませんので、避難所にいる人に対して食事を出すということが建前です。でも、現実問題は、新潟でも、余震が怖くてみんな避難所にいたり、あるいは、ライフラインが復旧するまでは、家にいても食事もつくれませんし、トイレも使えませんし、夜になったら真っ暗闇ですから、食事だけもらいに来る人については、静岡県でも出しますよね。断らないですよ。

【植田委員】 というか、具体的には、その前提として、日本では、避難所というのは、市、町が運営することになっておりまして、どこの避難所に避難するかというのは、地域ごとに決まっています。ですから、その人たちを守るという意味で、地域の人を守るための一手段でありますので、たまたまその人が、家が全壊して、ほんとうに避難所に寝泊まりしなきゃいけない状況か、水道、ガスがないために食べられない状況なので、食べ物だけもらいに来るか、そこはあまり区別するという考えはないです。

私たち、今、静岡県で考えているのは、もし東海地震が起きると、非常に広い範囲に被害を及ぼすものですから、できるだけ、自分のうち、安全なうちにいて、例えば1週間ぐらいの食料と水は備蓄してくださいというお願いをしまして、できればそっちで頑張れる人は自分で頑張ってもらいたい。不幸にして、うちがそういう状況になってしまった方は、避難所で暮らしてくださいというのが、こちらの考え、希望ではあります。

【田中委員】 補足をすると、最近の被災をされた方々の行動を見ると、公的避難所に避難をされている方は、大体半分ぐらいです。それ以外の半分ぐらいの方々は、親戚、知人宅に行かれるという方が増えています。ただ、それを拡大できない、あるいは最終的に避難所に戻ってくる方が多いという、1つのネックは、さまざまな情報サービス、例えば仮設住宅への応募とか、そういう情報をなかなか入手できないんですね。有珠山のときには、ホームページにさまざまな罹災情報を出したわけですがけれども、やっぱり聞き漏らしたかなという不安があって、とりあえず避難所に行っておいたほうがどうも有利なんじゃないかという声もありました。短期の人に関しては、半分ぐらいが公的避難所に行っています。

【山脇座長】 それでは、残った時間、本日の3人の委員の皆さんの御報告を踏まえた全体討議に移りたいと思います。きょうのお話の中で、自助の部分と公助の部分で、ちょっとニュアンスの違いもあるような、お話もあったかと思います。その点についてもう少し何か御意見があればお伺いしたいと思ったのですが、いかがでしょうか。

【羽賀委員】 私の場合は、自助というのは、あくまでも避難所までが自助の一番メーンであるということですが、実はあの後にいろいろ顛末がありまして、山古志村はあの後、雪害に遭っているんですね。だから、時間でもって災害の種類がどんどん変わっていくという状況が出た場合は、もう自助ではなくて、コミュニティーが崩壊していく中で、ほんとうに公と共がどういうふうに協働してそこにかかわるかがないと、家の荷物の運び出しもお年寄りにはできませんし、そういう問題がすごく出ました。長岡の場合は、地震の直前に7・13水害がもう来ていたんです。そのため、3つ体験した人がいるんですね。そういうふうに3つも1年に来てしまうと、これは地震災害でも何でもなくて、生活再建とさっき重川先生はおっしゃったけれども、その中に猛烈なインパクトが入ってきます。そのときには、先生がおっしゃったような社会システムの変化にだれもついていけない状況になっています。その問題もすごく大きいです。長期的な中で、どういうふうに助け合いをしていくのかということは大変だと思います。

【重川委員】 今の話題とはちょっと違うのですが、田中先生のパワーポイントの最後の制度から落ちこぼれる層がいるというところで、一番気になるのは、さっき羽賀先生がおっしゃった、中国から大量に來られて、要は、表の制度に乗らない方たちの被災直後とその後のプロセスが見えないですね。私は何度も強調しますが、国籍に関係なく、災害というのは、みんな大きな影響を受けますし、ある制度では不公平なことが発生するということは必ず起きるのですが、そうではない、まさに表立った制度に乗れない方たちの、直後から、あるいは1年、2年たった今までのプロセスというのが一体どうなっているのかというのを、もしおわかりだったら教えてください。

【羽賀委員】 特に中国の研修制度に関しては、全く変化はないです。私どもが来られると、研修をするのですが、どこかで線を引かれるんです。「ここから我々はコンタクトをとって、災害時には……」と言うと、「そこは結構です。我々自前でやります」と言うんですが、実際それをしないから問題がいろいろ起きます。

ブラジルの方たちに関しては、派遣会社の問題そのものです。ですから、生殺与奪権と、今、派遣を容易にするために、宿舎も同時提供する。これは、長期化してそこに市民化した方と、二極化が始まっている。ですから、流れ者として荒稼ぎで来られるというよりも、今、ここで足りないと、よそからどんどん引っ張ってくる。この二極化で、ごみの問題とか、いろいろな問題が出てきているのですが、人権ということを考えたときに、日本人における人権と外国籍の方の場合は、同じにはなれないんですね。社会システムがほんとうに制度としてそこに行き届いてない。ですから、大きな問題は、我々が介入をすると、途端に翌日には首を切られてどこかに行ってしまうので、我々も、表向きは入れなくて、後ろから入らざるを得ない。まさに日本の社会構造そのものの問題が噴き出してくるということです。それは年々悪化して、ワーキングプアは、ほとんどこういう方たちになってきて、この問題がまた二次的に多文化共生を妨げていると思います。

【李委員】 この長岡市の経験を生かして、長岡も既に経験をしたので、そういうふう

に対処すれば、同じことが起こったら、対処に対するマニュアルみたいなものが既にできているかもしれませんが、どうですか、マニュアルとかはできていますか。

【羽賀委員】 一応私のところでは、全国にしょっちゅう働きかけています。どこかでもってそういう要望があれば、うちからどんどんそういうものも出しますし、アドバイスもする。それから、全国の会議があると、必ずうちから出て、発表して、まず共有をしていただく。すごく大事なテーマは、こうやって皆さんが集まられたら、どこかにその経験を積み重ねて、そこをもう一度個別に市町村が持って帰るということがすごく大事だと思うんですね。でも、残念なことに、私のところが今、人口30万に近づいています。この長岡だと、何とか交流センターがあるので、意識としては変わるのですが、例えば小千谷とか、担当が外国人支援なんていうのがないんですね。そうすると、どこへ行くかという、うちがあえてその状況を超えて、バイク隊を出したりしたことで、長岡に来られたのですが、多分捨ててしまうことが現実だと思います。そこら辺の意識改革を制度的に、どこからはできるけれども、どこからはできない市町村が出たというときに、じゃあ、県との連動はどうするのかとか、具体的に詰めていく必要があると思います。

【田中委員】 現在、これだけいろいろな民のネットワークができてきている。市町村でできることと、民でできること、両方を育てなきゃいけないと思いますのですが。おそらくこの会議も、市町村の対策だけを上げようというよりは、全体の環境を上げるシステムを考えようという趣旨だと思います。つまり、ボランティアも含めたネットワークを強めていこうということだと思うんですね。確実にそれじゃないとできない部分というのはあるのだと思います。そのせめぎ合いをきちんと議論をしておかないと、大変難しい。あるいは言葉で終わってしまうという気はいたします。

【山脇座長】 事務局のほうから、次回、報告書の骨子といいますか、原案のようなものを出すことになっていると思いますけれども、最終的なアウトプットの方向性について、お願いしたいと思います。

【時澤国際室長】 去年の報告書も、いろいろな議論をした中で、国への提言、地方団体への提言、企業への提言、いろいろありましたから、今回も、県、市町村だけではなくて、国にできること、県、市町村にできること、あるいはNPO等をお願いするようなことを含めて、研究会で、幅広く提言とか、市町村に対しては指針なるかもしれませんが、そういったものをお示しできればと思っております。今、先生が言われた、広い観点からの議論ということで進めていきたいと思っております。次回は、ある程度骨子を示して、その骨子でまた議論を深めたいと思います。骨子は、早目に皆さんにお示しして、次回に骨子をお示しするわけではなくて、次回はその骨子の肉づけみたいな形で、どんどん議論ができるようにという進め方を考えています。

【幸田委員】 先ほどの社会システムという面でいろいろ問題があるという御意見があったのですが、羽賀さんにお聞きしたいのですが、災害の際に明らかになったシステムの問題については、いろいろ問題があるというお話があったんですけども、それを解決す

るためにどういうふうなことをしたらいいのか。あるいは何か具体的に羽賀さんとしてやられていることがあるのかということが第1点です。

もう一つは、長岡は30万という大きな市で、長岡市として国際交流センターとして、外国人にいろんな支援をやられたということですから、県のほうはどのようなかわりをやられたのか。あるいは、県と長岡市との関係、その辺のことがあれば。この2点をお願いします。

【羽賀委員】 2番目の質問からいきたいのですが、県のほうは、外国人支援に関してはゼロです。私のところに来られたのは2週間後ですし、全くやる気がないということですね。今もやる気がないし。

【幸田委員】 それはどうしてですか。

【羽賀委員】 日常から、ほとんど何の指針も持たずに、やったふりはいろいろしていますけど。だから、僕らはほとんど県をあてにしたことはないです。独自にやろうということ考えています。

もう一つは、先ほどの外国人の人たちへの支援ですけれども、今、協議会を立ち上げようとしています。彼らの意見をある程度社会的なバックアップの中で前面に出したほうが、愚痴にもならず、それから、それをどこかで反故にされないようにということで、今、考えています。

もう一つは、事前協議ということで、こういうことがあったら、おたくはどうしますか。我々はこういうふうなサポートをするので、それをぜひつなぐようにしましょうということころまでは話を持っていっています。

【山脇座長】 ほかにいかがですか。

【段委員】 2点ほど申し上げたいのですが、1つは、きょうのお話を伺って、マスコミの報道はやはり大きな問題ということで、今度の報告書の中でぜひ盛り込んでほしいのは、正確な報道を行ってほしいということです。

もう1点は、長岡市の今回のケースで、すごく感じています。ということは、一般の日本人社会だけでなく、もっとエスニックメディアに発信したらいいと思います。それぞれの言語で報道してもらって、知ってもらうことが大切かなと痛感しております。初めてこういったことを知ったのですが、いわゆる不法滞在者も含めて、もっと多くの人々に。そういった人々は、中国語の新聞はちゃんと読んでいますから。そういう情報を、いろんなエスニックメディアに発信するということは、これから必要かなと思います。

【山口委員】 重川先生は、地域のコミュニティーが大事だ、重要だと。つながりということが大事だとおっしゃられていましたけれども、特に外国人も含めた地域のコミュニティーのあり方といいますか、どういうふうに形成といいますか、その辺のところは非常に難しいと思うのですが。おそらく長く住んでいる方は、地域のコミュニティーの一員として当然いるということですから、その辺のコミュニティーづくりというか、コミュニティーのあり方というか、あるいは、長岡のときに、現状のコミュニティーでどんなよ

うな問題があったのか、あるいはどういうふうなコミュニティーづくりをしなければなら
ないか、その辺のお考えがあれば。

【羽賀委員】 一番我々が困ったのは、外国籍市民の人たちが、自分たちのコミュニ
ティーを持っていなかったということです。私たちもそこに働きかければ、通訳が出てく
るだろうと思ったのですが、特に国での社会的な所属がそのまま海外に出てきてしまっ
ているという部分も非常に大きな課題になります。ですから、一概に、「フィリピンから来た
お嫁さん」というふうにもできなかったんですね。水商売からお嫁さんになられた方と大
学を出てパートナー探しに来られた方と、それから、そうではなくてという、3つぐらい
に分かれました。これは決して融合しなかった。それは初めて私たちも気がついたこと
です。

コミュニティーづくりを私たちも始めて、とにかくわかりやすい、楽しいところに一た
ん入れて、そこから人間として結びつけて、それを広げるしかないかなと思っています。
実はごみの問題が長岡でも、今、ものすごく大きくなっています。国際運動会というのを
21日にやるのですが、そのときに、半日、運動会をする。それに今、150名ぐらい申
し込みがある。その中で、日本人もボランティアとして入る。午後はバーベキューをやる
のですね。そのときに、環境整備課から来てもらって、実際のごみを通して、これはだめ、
あれはいいというゲームをするんですね。そういうふうに、地域の町内会長をはじめ、町
内の人たちにも入ってもらって、「実際、私たちはこうやっているけど、あなたたちはどう
したらいいと思いますか」というのをやってしまうという手法を今考えています。

【重川委員】 大賛成で、実はコミュニティーの問題は外国人特有の問題ではなくて、
日本人そのものの問題で、国籍に関係ない。例えば災害時に仮設住宅ができますよね。仮
設住宅に住んでいることだけで、地域のコミュニティーから日本人も差別されるんですよ。
「あの人、仮設だよ」って。神戸のときにもありましたし、新潟でもありますけれども。
だから、独身の女の子なんかは、仮設から通っているということは職場にも言わないとか。
そういういろいろな差別は必ずあります。日本人、外国人に限らず、とにかく住んでいる
地域の一員として、一方的に与えられるのではなくて、能動的に何かみなしようよとい
う仕掛けをつくるという。いかにおもしろい仕掛け、羽賀さんがおっしゃったようなもの
を、特に外国人対策ということを銘打たずにやっていかないと、日本人そのものも、自分
たちも危ない状況です。

【羽賀委員】 簡単に言えば、定義づけは難しいのですが、住民というのは、お
上が何かしてくれるのを待っている人だと思って、市民というのは、自分のコミュニ
ティーを何とかしたいという前向きな人たちの集団、それをどう発露するかの問題かなと思っ
ています。

【植田委員】 実は私、今言おうと思ったことは、大体重川先生がおっしゃってくださ
ったものですからあれですけども、私は役所の人間ですので、少し別な言葉で言わせて
いただきたいと思います。

羽賀さんからお話がありましたように、もともと計画していたことを実施しようといっても、災害というときだと、まずできないのがほんとうだと私も感じています。平成13年の4月3日に静岡で震度5強の地震がありまして、震度5強の地震というのは、静岡県職員が全員集まるという段階の地震ですが、そのときに、そういうことはちゃんと紙に書いてあって、新採職員研修でもやっている、主任の研修でもやっている、管理職の職員の研修でもやっているのですが、それがいかにできなかったかと。紙に書いたことというのは、災害になりますと、半分もできないと私はそのとき身にしみて思いました。しかし一方で、防災局の職員として日ごろから訓練としてやっている、あるいは、きのうも実はそうだったのですが、大雨洪水警報が出て、何人か職員が残って対応している。そういう日ごろやっていることは、災害が起こって、いろいろな障害があっても、半分くらいはできるんです。そうすると、計画で考えていたことが半分、それから、自分が日ごろやっていることが半分できる。これは同じ半分ですけども、計画に書いていることは、それしかできない。しかし、日ごろからやっていることは、半分は、どんなに条件が悪くてもできるという自信という意味での半分ですけど。

そういうことを考えますと、我々も、災害に備えて、きょう、いろいろな事例のお話が出ましたけれども、最後は重川先生がまとめてくださったように、おもしろい仕掛けというか、日ごろから、災害を念頭に置くことはあまりないのですが、今、日本の中にある外国人の社会とどうつながりを持っておくか、接点を持っておくかということが、災害のときに、そのシステムがどう生き残るかという話になってくるのかなと思いました。うまく言葉ならないですけど、日ごろから使える仕組みを組んでおこうと。具体的には、市、町や県の職員の通訳職に外国人の住民の方を登用する制度であるとか、どなたかの提案にございましたけれども、民生委員とかに類似したような仕事を外国籍の方にもお願いするかというような制度があってもいいかなと思います。

それを補強して言うならば、私どもがやっています防災の仕事も、10年前、20年前にはこんなに役所の中でステータスというか、位置がある、席がある仕事ではなかったんです。ただ、それを総務省、消防庁などの指導があって、県ごとに部長級の防災に関する人を置きなさいと。それを受けて、我々静岡県は、各市町に、少なくとも課長級以上の防災担当セクションを置きなさいということを言って、それは非常に日本の社会的な仕組みですけども、そういう役人を置くことで、それなりに仕事をやってきたという経過があります。ただ、それを外国人の方の問題に当てはめると、日本人でできる人は非常に少ないものですから、どうしても言葉の壁がありますので、そこにいろんな外国人の人を使っていくという方法を、また骨子の中でも御提案していきたいと感じました。

【山脇座長】 そろそろ時間が来てしまったのですが、本日まだ御発言いただいていない委員の皆さんで、もし何かあれば一言伺おうと思いますが、いかがですか。

【岡崎委員】 羽賀委員さんの交流協会は非常に活発に活動なさって見えますが、組織として人数は何人いらっしゃるのでしょうか。

【羽賀委員】 私のところの交流協会も、実は行政絡みの交流協会です。非常にねじれていて、姉妹都市交流しかもともととしてなかったんです。そこに私が来て、おかしいと。センターを別につくりました。1つは、多文化共生をやるときに、差別と重川先生はおっしゃったのですが、猛烈な差別があるわけです。だから、国際というのは、日常化して、人がいるという目線におろすには、国際交流センターを目抜き通りの一番いいところに持ってきて、1階で、道路に面して、そこが市民センターの窓口に近いようにしたんですね。そこはオープンで、国際会議でも全部、市民が横目で通るところで、こういう会議をするようにしました。人数的には、4人しかいません。私のところのほうが、人数が多くて、職員と兼務が入っておりますが、かぶる仕事とかぶらない仕事があるのですが、共通項がすごくある。一番いいのは、その場所で、外国籍市民だけではなくて、子供たちが当たり前前の自分たちの場として入ってきてくれる。国際理解の場でもあるし、市民の活用ということでも、我々はいろいろな活動をやっているんですね。そうすると、100名ぐらいで、自分たちを知ってほしいというふうに働きかける活動がオープンでいつもやられています。締め切ってしまうと会場という感じになるのですが、そうじゃないと、レイアウトも適当にみんなで変えて、皆さん、用がなければ来ない行政から、用がなくても来る行政になりましたね。それが一番、日常的に要望も拾えるし、意見交換もできる。それを僕らは、ファクターを構造化していくというところに行政がいればいいのかなと思って、その中で交流協会と一緒に協働しています。

【金谷委員】 きょうのお話を伺いながら、さっき植田さんのお話にもあったのですが、特に災害対応という目から見たときに、外国国籍、あるいは文化の違う方々にどう対応するかという話と、それから、我々行政の側から見たときに、行政といっても、よく言う縦割りというか、こういう目でしか見えない。逆に言うと、国際交流、あるいは国際と名がつく部局が、そこは何をやっているかという、さっきお話がありましたような、姉妹都市とか、姉妹交流とか、そういったことしかやってない。ただ、昔から言っている内なる国際化の世界の中で、地域の中に外国の方々が多く入ってこられている。そこをどうするかというのは、災害というのは、さっき田中先生がおっしゃったように、いろいろなことが顕在化してくるという状況、あるいは、そこで見えなかったものが見えてくるという状況だと思います。

ですから、今回の議論の中で、国際化の視点ということはあるのですが、さっき重川先生がおっしゃったような、みんな、国籍にかかわらず、だれでも、という、その世界というのが、おそらく災害対応の部分の一番共通項だと思います。結局そのときに、日本人であっても、疎外されている人、わからなかった人、乗っかってなかった人、そういうのが必ず出てきているわけなので、その部分をここの中で議論する。ここでの議論は、文化の部分と言葉の部分、そういうふうなのが出てくると、それがやっぱり地域の取り組みとすごく違いますから、共通項の部分を何とか、行政の面で、国際セクションの中にそういう意識を持つ。ただ、逆に言えば、国際セクションをやっているところに、「外国人の

人たちの防災のこともきちっとやってくれ」と。これは多分ほとんど動かないと思います。逆に今度は防災セクションのほうに、「外国人の人たちのこと、国籍の違う人のことをやって」「そんなこと言っても、こっちがいっぱいあるのに」と。その部分をうまく……。これをあんまり言うとしかれそうですけど。共通項の部分でできるところを、できる限り地方団体なり、あるいは地域のところなりが、そこだけではできないよというところをいかにオファーしていったり、フォローしていったり、あるいは提供していったりとか、そういうふうなことをぜひこの中でくっつけていっていただきたいなと。

災害に限って言いますと、どんなことができるかというのは、極端に言うと、災害の規模次第ですね。でかくなったら、さっき植田さんがおっしゃったように、地域がばらばらとなって、そのところで何とかやれと言われても、行政なんかほとんど何もできない状況。ほんと言うと、ものすごくやるのですが、ものすごくやっても、分母がでかくなり過ぎて、ほとんど見えてこないといえますか、一番究極のところに頑張っているけれども、やっぱりそれは自助の部分というのがものすごく広がる。ところが、非常に局地的、あるいは部分的な話になってくると、全国から見ても、支援の目が一遍に行くわけですから、今度は逆に言えば、その中での調整の話になってくる。それもあまりスムーズにいかないところというのは、やっぱり局地的な部分と、災害という観点からいうと、でかさ、多分それが一番大きい要素だという感じがします。

【田中委員】　今まで防災というのは、防災部局がやってきた。というのは、それなりに日本の防災もレベルが上がった。それと同時に、阪神という1つの大きな経験があって、それでいろいろな問題がまた噴出した。そういう面では、現局がどう防災に取り組むかというのが実はものすごく大事になってきた。ただ、それは、言っても大変だというのが、多分共通した実感ですね。そのときに、ここのコンセプトというのは、逆に防災というのを武器にして、例えば国際交流というものを突破していこうじゃないか。あるいは防災というのを突破口にして、高齢者福祉を進めようじゃないか。そういう攻めの道具としての防災というものをうまく見せていただきたい。それが多分消防庁さんの大変大きな仕事なのではないかという気がしています。「おまえやれ」と押しつけるのではなくて、「これをやると、これだけいろいろと仕掛けができるよ」みたいな、それをぜひお願いできればということで、蛇足までに。

【金谷委員】　そういう意味で申しますと、今、我々の考えている、我々といいますか、防災行政という切り口でやっていくときに、いろいろなものが防災に生かれますよとか、そういうところがいかに出てくるか。さっき植田さんが言っていますけど、ふだんやってないことは絶対できないというのは一番びったりしてくる部分で、だから逆に言えば、ふだんやっていることがどれだけ防災に生かせるか。あるいは逆に言えば、防災が言っていることをやっていけば、まさにいろんなセクション、いろんな分野がやっていかなきゃいけない、そういうことができます。それは我々も非常に重要な視点だと思っています。ただ、それをうまくやっていくアイデアをまだまだ我々は求めている段階なので、逆に言え

ば、そういったところがあると我々も、まさに「攻め」というお話がありましたけれども、アメーバのように増殖しよう、あるいは浸潤していこうというのはあるかもしれませんが、やっぱりそういうふうなところがないと、おそらく、ための防災をやっていたら絶対役に立たないというのは、我々も非常に実感していますので、その部分をこのところを出していただければ、我々もありがたいと思っております。

【山脇座長】 どうもありがとうございました。議論が盛り上がってきたところですが、時間になってしまいました。きょうは、特に後半、いろいろな論点が出ました。自助の問題、公助の問題、国際担当としての役割、防災担当としての役割、外国人をターゲットにした取り組み、外国人も日本人も含めたすべての人を枠組みとして考えるアプローチ、あるいは平時においてどういった仕組みをつくっていくかということ、それから緊急時における対応、そしてまた広域のネットワークの問題とその地域における活動、そういったいろいろな次元で、なるべく総合的にとらえて打ち出していくことが大事なのではないかということを今日の議論で私は感じました。そういった皆さんのいろいろな御議論、論点を踏まえて、早急に事務局と相談しながら、この研究会の報告書の骨子をつくりまして、また皆さんに御相談したいと思います。

それでは、これをもちまして、本日の議論を終わりたいと思います。